魔法少女リリカルなのはStrikerS 変わらないもの

時計屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　変わらないもの

【Ｎコード】
Ｎ０４１４Ｙ

【作者名】
時計屋

【あらすじ】
一人の女性が紡いだ予言は、一つの強大な組織に警鐘を鳴らす。その予測された未来を回避する為、遺失物管理部に新たな部隊が設立された。その部隊を中心として、様々な事件が発生する。果たして、その先に見えてくる真実とは……。
――拙作は“魔法少女リリカルなのは”の世界観、諸々の原作設定に対し、独自解釈や設定の捏造を多分に含みます。それに伴い、原作から激しく逸脱した内容になる可能性があることを先に申し上げて置きます。――

プロローグ（前書き）

拙作は私の処女作となりますので、色々と至らぬ点もあるかと思います。文法の間違いや誤字・脱字等が御座いましたら、指摘して頂けると助かります。

プロローグ

煌々として燃え盛る炎がミッドチルダの夜空を赤く染め、天高く立ち上る黒煙は見る者の不安を煽る。此処からだと人の姿は針の先のようにも感じるが、それでも男にはあの場の喧騒が風に乗って聞こえていた。

湾を挟んだ先にある臨海第八空港が騒然としているのは、ここから見ても明らかだった。つい先ほどまで通常通り機能していた空港には、平日の夜とはいえそれなりの数の人間がいたはずだ。建物全てを包み込む炎の勢いは凄まじく、空港は文字通り火の海だ。あれを見る限り、一般の救助隊では手に余るだろう。近隣の陸士部隊も駆け付けて来ているようだが、事態が好転しているようには見えない。管理局の慢性的な人員不足が、今まさに顕著に現れていると感じた。

増援として首都航空隊の航空魔導師が出向くはずだというのは、男の隣に立つ男性――ティーダの言葉だ。そしてそれは、各種の手続きを済ませた上で、やっと出動するらしく、訪れるまでまだ暫く時間がかかるらしい。

燃え盛る炎は衰えることを知らないかの如く、今なお空港全体を多い隠さんと勢いを強めている。そんな中、星空さえ遮る黒煙を背景に、漆黒の空に二筋の光が走るのが見えた。それぞれ黄色とピンク色をした二色の軌跡は、途中で別れると空港内部に吸い込まれていった。

光の色は個人の魔力光によって違いはあるものの、あの光の尾は航空魔導師が高速飛行時に残すものだ。基本的に無色透明というこ

とは有り得ず、つまりは二人の魔導師が到着したことを示している。しかし、この規模での火災で増援が二人とは如何なものか。男は「あれだけか？」と眉を顰めて訝しむ口調で、魔導師が突入した空港を眺めて誰にともなく尋ねた。

「……航空隊の魔導師にしては数が少ないな。彼らであるなら、少なくとも小隊単位で訪れるはずなんだが……」

男の疑念を聞いたティーダが、怪訝な調子で言う。全身を覆うような形でフードを被っている為、こちらから窺えるのは露わになっている顔だけだ。それにしても、右目を隠すように伸ばした前髪により、男の位置からでは詳しい表情は見えない。唯一、口元に指を沿わせて、考える仕草をしているのは見て取れた。

男はそんなティーダの様子をちらと横目で伺い、言われてみればその通りだと納得する。管理局の魔導師部隊が、基本的に4人前後の小隊で行動するのが常であるのは知っている。そして、ティーダの言葉を受ければ、それは首都航空隊も例外ではないようだ。

心なしか空港が先ほどより騒がしくなった気がする。パッと見に大きな変化はないが、少数ながら航空魔導師が到着したことで、少なからず勢い付いたのだろう。尤も、主観による推測なので、確信と呼べるものは何もないのだが。

「何にせよ、二人とはいえ空戦魔導師が来たんだ。本隊が来るまでの繋ぎにはなるだろ」

それに、と男は思う。今更ながら、あの二色には見覚えがあったのを思い出す。もし自分の予想する二人であるなら、純粋に魔導師としての能力を見れば、これほど心強いものはないだろう。

「ああ、だといいんだが……」

隣に立つティーダが身動ぎした気配を察する。恐らく顎から指を離したのだろう。それと共にどこか歯切れの悪い言いように、男は徐に隣を向く。あまり気にするな、と言おうとしたのだが、ティーダも同じようにこちらを見ており、二人は真正面から向かい合う形になった。

ぶつかったティーダの青い瞳の中、僅かにくすぶる憤りの色を見つけた男は、言おうとした言葉を飲み込む。彼はそういう奴だったな、と内心で苦笑しつつ、ティーダに会話の先行権を譲る意味合いを込めて口を噤む。伺う視線を寄越したのも束の間、男の意を汲み取ったらしいティーダは、横目で空港を一瞥してから口を開く。

「イージス、やはり俺には静観することはできない」

若干の焦りが含まれる調子でティーダが言う。口に出して余計に意識してしまったのだろう。今にも飛び出していきそうな雰囲気、まくしたてるような口調で続ける。

「君や俺の立場がどんなものかは理解しているつもりだ。しかし、今この瞬間にも――」

「分かった」

男――イージスはティーダの言葉を静かに遮って小さく首肯する。ティーダの言わんとしていることは、これまでの付き合いで予想はできていた。

急に台詞を遮られた当の本人は、言われた言葉の真意を掴めない

のか、怪訝な表情を禁じ得ないでいた。イージスはそんなティーダの様子から心情を読み取り、ポーカーフェースを苦笑気味に変えて言う。

「民間人を助けに行く、と言うんだろ？　最低限留意すべき事項を守るなら、お前の行動に制限は付加しない。隠蔽方法は任せる、行ってこい」

寄せられていた左の眉が、何時の間にか驚きに目を見開いていた。だが、それが伺えたのも束の間、ティーダは眉尻を下げた申し訳なさそうな表情で、一言だけ口にする。

「すまない……」

呟くようなその一言の中に言葉通りの意味の他、感謝の意が込められていることは、イージスには分かっていた。ティーダが感謝の言葉を口にしなかったのは、おおかたこの行為によって自分にどんな非が下るか、そんなことを考えたからに違いない。正義感の強い彼のことだ、自分の行動のせいで他人が非難されるのに抵抗を感じ、自責の念から謝罪の言葉が出たのだろう。

イージスはティーダの内心をそう想像し、今度は意識せずに小さな笑みを浮かべる。言外に気にするなと含めた表情の後、ちらと空港を見やって言葉を紡ぐ。

「あの様子じゃ余裕はあまりないだろう――行ってこい」

「君には本当に迷惑を掛ける……」

ティーダがイージスの言葉に体を空港に向け、自分が着ている物と同じ薄汚れたフードの懐から、青く縁取りされた一枚のカードを

取り出す。

丁度そのとき、空港の一部が爆発し、黒煙と共に炎を吹き上げた。それに倣うように、各所で爆発らしき小規模の閃光が発生し、火災は益々勢いを増す。内部の状況は想像するより他ないが、爆発によって内壁が崩壊した可能性がある。人が残っているのなら、一刻の猶予もないのは明白だった。

「ッ、落ち着いたら例の場所で落ち合おう！」

それを見たティーダの表情は一変し、取り出したカード――正確にはデバイスの待機状態――を振り下ろして起動させる。

ここで言うデバイスとは、魔法を扱う際にその補助として用いる機械を指す。使用用途によって幾つかの種類に別れるが、ここでティーダ取り出したのは“ストレージデバイス”と呼ばれるものだ。純粋な道具としての使用を目的としたそれは、目立ったクセの無い最も代表的なデバイスと言える。

赤み掛かったオレンジ色の光にティーダが包まれる。しかしそれは一瞬のことだった。光が収まったときには彼の服装は一変し、手には一本の杖が握られていた。

その服は全体的に落ち着いた色合いをしていた。一見するとロングコートのような濃紺の服の上から、鈍く光る銀色の胸当てを付けている。白を基調とした杖は、長さは１ｍ弱、先端部が金色の音叉状に別れている。この服はバリアジャケットと呼ばれる魔力で構成された防護服であり、右手に持つのが起動状態のデバイスだ。

ティーダは装備の展開を一つの動作で終えると、コートの裾を翻

して飛び立つ。そして、魔力を視覚されないよう、必要最低限の量だけを身に纏い、海上を水面すれすれで飛行して行く。

来たるべき航空隊の増援に備え、管理局の注意は上空に向いている筈だ。加えて火災で手一杯の彼らが、余所に目を向ける余裕はないだろう。余程目立った行動を取らなければ、簡単には発見されることはない。そう考えるイージスの思考を裏付けるように、管理局にはティーダの接近に気付いたような雰囲気は伺えなかった。

突如何の前触れもなく、空港の中央部付近から、天に向かってピンク色の細い柱が立った。それはティーダが何事もなく空港に到達したのを見届け、先に合流地点へと向かう為に踵を返し掛けた時だった。

柱の正体が砲撃魔法だと気付くのに時間は要らなかった。恐らく、先刻突入した魔導師の一人が放ったのだろう。続いて空港から脱出する光も見え、砲撃の質と魔力の色も踏まえて、彼の当初の予測は確信に至った。

「あ～ら、計画性の欠片も見えない脱出方法ですねぇ」

遠くの喧騒だけが僅かに聞こえていただけの空間に、間延びした女性の声が響く。その声にイージスはピクリと僅かな反応を示すと、ゆっくりと振り返った。

イージスが立っているのは、既に使われていない港の埠頭だ。この港は臨海第8空港の開設と同時に廃棄されており、付近には人が住める住居などない。それらのこともあり、普段は昼間から森閑としている。

視界には相変わらず、打ち捨てられ錆び付いた倉庫が整然と立ち並んでいる。辺りが暗いこともあるが、人の姿など影も形も見えない。だが、それこそが“彼女”の能力であることを知っているので、イージスは驚きを面にすることはなかった。

振り返った彼の目の前に、一人の女性が何の前触れもなく姿を現した。女性は茶色の髪を三つ編みのおさげにし、体のラインを強調する濃紺のボディスーツに白いケープを羽織っている。その出現方法は、あたかも透明な空気の幕から、不意に現れ出る様なものだった。

前もって予期していたとはいえ、思わず声が漏れそうになった。しかし、何とかそれを堪えたイージスは、浮かべた苦笑で内心を誤魔化す。些細なこととはいえ、弱味を見せるのは嫌だった。

５mも離れていない距離に立つ女性――クアットロは、イージスの背後の空港をちらと伺ってから、彼と視線を合わせる。そして、まるで最初からそこに居たかのような飄々とした態度で、眼鏡の下に違和感のない笑みを浮かべた。

その愉しげな笑みに、イージスは不意に背筋に冷たいものが走るのを感じた。日常で今の笑顔を見ても、自分はこんな感覚は覚えない。それでも、あの悲惨な空港火災の状況を見て、彼女は何か可笑しな物を見たかのようだった。冷酷、イージスの脳裏にその単語がよぎった。

「空港の方は随分と大変そうですねぇ。イージスさ～ん、あなたは行かなくていいんですかぁ？」

そんな彼の内心を知らないクアットロは、やはり緊張感のないの

んびりとした口調だ。他人事、その一言で済まされそうな態度で、変わらず笑みも浮かべてもいる。

彼女の語感にイージスの苦笑が僅かに深まる。彼女がいつから見ていたのかは知らないが、少なくともティーダが空港に向かったのは知っているようだ。しかし、それでも何も言わなかったのが、こちらを信頼しての行為でないことは、自分たちの置かれた立場なら分かりきったことだった。

「既に御存知のようですが、空港の方にはティーダが向かいましたので。……クアットロさんは何でこちらに？」

次いで浮かんだ疑問を尋ねてみる気になったイージスは、疑念の表情をクアットロに向ける。

「私は“例の物”を自分の目で確認しに来ただけです。誤報と言うこともありますしぃ」

クアットロは言いながらゆっくりと歩き、イージスの傍らに並び立つ。「でも～」と続けるクアットロの視線は、真っ直ぐ空港に向けられている。横目で様子を伺うイージスは、彼女の次の言葉を待った。

「あの様子じゃそれはなさそうですねぇ。本当、とんだ無駄足でした」

クアットロは呆れ顔で肩を竦めてみせる。何を期待していたのか、その口調にはどこか落胆の色も見えた。

イージスが思わず苦笑を漏らし掛けたとき、視界の端にある空港

から、大きな魔力反応を感じた。傍らのクアットロはわざとらしい驚きの表情をしており、イージスは何事かと空港に振り返った。

相変わらず空港は火の海で、鎮火の様相は欠片も伺えず、吹き出す黒煙の勢いは衰えていない。当たり前だが突入したティーダの姿も確認できず、いたとしてもここから判別できるものではないだろう。

そのもくもくと立ち上る黒煙を背景に、この魔力反応の原因と思われる魔導師が、空中で白い魔法陣を展開していた。それを遠目に見た瞬間、イージスは驚きの表情を隠しきれなかった。

大きすぎる魔力反応もこれで納得がいった。白い魔導師は自分の知る人物だと、そう確信に似た気持ちをイージスは抱く。同時に、遠目だが自分の記憶と大差ない様子に、自然と口元が緩みそうになった。

空中に滞空していた魔導師が、空港に大規模な氷結魔法を放つ。それにより、見える範囲で空港の４分の１の炎が、あっと言う間に消火される。持ち味の広域魔法は健在のようだった。

「ほ～んと、桁違いのバカ魔力だこと」

それを見たクアットロは言い捨てた後、関心をなくしたように踵を返す。

「私は先に帰りますね～。もう用はありませんし、興味もなくなりましたから」

言うが早いか、クアットロはイージスが何か言う間もなく、姿を

消していた。

しばし呆然としてしまったイージスは、直ぐにハッとして気を取り直す。改めて空港に意識を向けると、そこから向かって左側に航空魔導師の編隊が接近するのが確認できた。

ようやく到着したか、と一安心したイージスは、今度こそ合流地点に向かおうと踵を返す。ティーダも増援が来たと知れば離脱するだろうし、ここに長居は無用だ。僅かに名残惜しい気持ちを抱きながら、沈静に向かいつつある空気を背後に感じつつ、イージスは心持ち急いでその場を後にした。

第一話

座りなれない革張りのソファーがやけに柔らかく感じる。何となく座り心地が悪く感じたクルト・ローレルは、僅かに身じろぎして居住まいを正してから、対面に座る二人の女性に改めて向き直った。

白色の人工灯が満遍なく照らす室内で彼女らと向き合って座り、五分少々は経過したと思う。その間に話したことといえば、簡単な自己紹介と他愛のない世間話くらいだ。ここに呼び出された本来の用件については、未だに触れられてはいなかった。

「じゃあ、世間話もこのくらいにして、そろそろ本題や」

一旦会話が途切れたときだった。向かって右側に座る茶髪の女性――八神　はやての言葉に、クルトは心持ち背筋を伸ばし気構える。それを見て八神は一度小さく笑んでから、表情を引き締めてその独特の口調で言葉を続けた。

「君は自分が何でここに呼ばれたんか、その理由は聞いとるか？」

「いいえ、具体的な内容についてはなにも……。ただ、新設の部隊に関することだというのは、そちらにいるヴィータ三尉から聞いています」

八神に向けた視線はそのままに、焦点を合わせず上司の様子を伺う。八神の隣に座る彼女より一回り以上小柄な上司は、腕を組んでこちらを見ていた。

そもそもクルトが今回の件をヴィータから聞いたのは、今日が初めてのことだ。当初は本局へ出向く用事があるとのことで、同行を

求められたのが切っ掛けだった。それが終わってから、唐突に「会わせたい人がいる」と言われ、この応接室に連れてこられた。道中で大まかな話は聞いたものの、詳細は未確認だというのが現状だった。そこまで思い出したところで、八神の話し出す雰囲気を感じ取ったクルトは、改めて目の前の女性に意識を集中した。

「遺失物管理部　機動六課……それが新部隊の名前や。ロストロギアを専任して取り扱う部署の中でも、機動六課は実働部隊として動くことになると思う。部隊長には私が就く予定になってるし、その為の準備も進めてる。でも、まだ隊員が足りてる訳やないんや。そこで、今日の本題になるんやけど……」

八神は卓上に肘を着いて指を組むと、一呼吸置いて続ける。

「今日、私がここに君を呼んでもろたんは、その新部隊に君をスカウトしたいて考えてるからや。この部隊の特性上、危険度は今の部隊より高くなると思う。でも、その分として密度の濃い経験が積めるやろうし、自ずと昇進機会も増える。……どないやろ？」

ヴィータから話を聞いたときから、薄々は予想していたことだった。それだけに驚きこそしなかったが、直接口に出されると戸惑ってしまう。「はぁ……」と不明瞭な返事をする一方で、頭では件の部署に関して自分の知る限りの情報を思い出してみた。

本局付きである遺失物管理部は、ロストロギアの調査や確保を行う部署だ。そもそもロストロギアとは、既存の技術を遥かに越えた知識・物品を指し、使い方次第では一つの世界を消滅させかねない程危険な物もある。そんな危険物を取り扱うこの部署は、優秀な魔導師が所属するエリート部隊、と言うのが自分の認識だ。

改めて考えると、突出した技能がある訳でも、魔導師ランクが特別高い訳でも無い自分が、そんなエリート部隊に誘われるとは思ってもみなかった。そこでの経験は今の自分にはプラスになるだろうし、自分の夢により近付けるような気がする。

本音を言うと、八神の勧誘は受けたかった。そうは思っても、クルトは直ぐには答えかねた。部隊間の異動に関して、一部隊員である自分にそれを決める権利がないことは、１４歳のときに入局してから四年目になろうとしているクルトにも分かっている。ここで安易に答えて、自分の所属する部隊やその部隊長に迷惑を掛ける訳にはいかなかった。

そう言えば、ここに連れて来たヴィータはともかく、部隊長はこの話を知っているのか。もし知っていて許可したのだとすれば、三尉は何か話を聞いているだろう。そう思い至ったクルトは、八神に向けていた顔をヴィータに向け口を開く。

「あの、ヴィータ三尉……」

「ん、なんだ？」

脈絡なく話しかけられたヴィータは、腕を組んだまま怪訝な表情でクルトを見る。彼女は赤色の髪を後ろで二つに分けたおさげにしており、前髪で一本だけ跳ねているほつれ毛が、こちらを向く際に合わせて小さく揺れた。

「今回の件なんですけど、部隊長はこのことを知ってるんですか？」

「ああ、そのことか。部隊長にはあたしが話をしてある。お前の意志を尊重する、ってのが隊長の言葉だ」

女児のような外見だが階級に見合う威厳を持つ上官の言葉を聞き、

クルトはそれならと意志を固める。八神の方へと向き直り、今度はハッキリとした口調で言う。

「そうですか。……八神二佐、俺で良いならその新しい部隊に入りたいです」

「そうか。君ならそう言ってくれるて思っとったよ」

組んでいた指を解いて体を起こし、八神は年相応の朗らかな笑みをみせる。訓練校時代以来、年の近い女性との関わりが薄かったクルトは、その笑顔に不意にドキリとする感覚を覚える。顔が熱くなるのを自覚しつつ、「あ、でも……」と照れ隠しに似た思いで口を動かす。

「俺、まだ転換訓練が完全に終わった訳じゃないんですけど、それでも大丈夫なんですか？」

「勿論、そのことはヴィータから聞いてる。訓練がきちんと終わるまでは交替部隊に所属する形にして、実戦は極力控えて貰うつもりや」

「はやての部隊にはあたしも参加する予定だしな。ヒヨッコのお前がまともに飛べるようになるまで、これまで以上にビシビシ鍛えてやるから覚悟しろよ」

自分のような一部隊員はともかく、隊長クラスの上司も一緒に異動することは流石に予想外だった。クルトは思わず「え？」と口に出してしまい、「なんだ、その反応は」とヴィータの厳しい視線を受ける羽目になった。

「今のお前はせいぜいド新人から片足抜け出した程度だ。そんな奴の訓練を途中で放り出しちまったら、どこで犬死にするかわかったもんじゃねぇからな」

いつも通り辛辣なヴィータの言葉にクルトは言葉に詰まり、消沈した気分を苦笑で誤魔化す。彼女の隣に座る八神に至っても、困惑気味の苦笑を浮かべ傍観に徹している。「まぁ、でも」と再び言葉を紡ぐヴィータの声を聞き、クルトは意識して表情を引き締めた。

「そうじゃなくても、お前の面倒を見るのはあたしの役目だしな。他の奴に任せて、変な癖がついても仕方ねぇし。引き受けたからには中途半端は嫌だし、だから……まぁ、そう言うことだ！」

クルトの視線にそっぽを向いて、ヴィータは半ば投げ遣り気味に締めくくる。先ほどの言葉に対し八神から念話で窘められ、何かしら取り繕う言葉を探したのだが、上手く纏められずうやむやに終わった結果だった。クルトはそんなヴィータの事情を察することは出来ず、引き締めた眉尻を下げ困惑を露わにする。だが、直ぐにハッとして表情を引き締め直すと、「ありがとうございます」と無難な台詞を口にしていた。

「なんにせうまく話が纏まったみたいやな。じゃあ最後になるけど、クルト一士、今の話で何か質問はあるか？」

「いえ、大丈夫です」

八神からの質問に僅かな逡巡もなく言う。現時点で彼女に尋ねることはなく、あったとしても自分には関係のないことであろう、とクルトは言った後で思った。

クルトの問いに八神は「そうか」と満足げに頷き、ソファーから立ち上がる。それを見てクルトも慌てて立ち上がり、次いでヴィータもゆっくりと立ち上がる。自分より頭一つ分程背の低い八神と、それより更に小柄なヴィータに、姿勢を正して相対する。

「次に会うのは部隊の設立式になるやろ。そのときまでしっかりヴィータ三尉の教導を受けて、少しでも一人前の局員に近付くことを期待しとるよ。くれぐれも訓練をサボったりしたらあかんよ？」

そう言って悪戯な笑みを向ける八神に、クルトは返す言葉に迷いつつ、気の利いた言葉が出て来なかったので、結局は敬礼と共に「精進します」と口にした。

「うん、頑張りや」

そう言って八神は手を差し出す。クルトはその意図が掴めず、姿勢を変えず彼女の手と顔を交互に見る。八神はクルトの様子に苦笑を一つ漏らしてから、

「新年度から私らは同じ部隊で働く仲間になるやろ？　だから、ほら。親愛を示す握手や」

「あっ」

クルトはそう言うことか、と納得の声を漏らす。今まで佐官階級の人間はおろか、部隊長になろうと言う人間からそのような行為を求められたことが無い為、そこに考えは至らなかった。慌てて額に当てていた右手を差し出そうとするが、その掌が先ほどからの緊張で汗ばんでいることに気付く。上着の裾で二回三回と拭ってから、改めて手を差し出した。

女性との縁が深いとは言えないクルトに取って、女性に触れるという行為自体に耐性が低い。失礼だとは思いつつも、形式的とはいえ自分から握りに行く勇気は無かった。そんなクルトの事情を知ってか知らずか、八神は差し出された手を自分から握りに行った。

握られた瞬間、クルトは自分の神経が右手に集まる感覚を覚える。ほんのりと冷たい体温も、自分より柔らかな手も、いつもより過敏に感じる気がする。二等陸佐という自分より遥かに上の階級の人間である前に、彼女は１９歳の女性であるのだと、気恥ずかしい思いを誤魔化す為、クルトはどうでもいいことを考えていた。

思考で意識を別にしたとしても、感覚がなくなるわけもなかった。ふと考えが途切れたとき、薄れていた右手の神経が過敏に働き、再び蘇った感情を今度は曖昧な笑みで誤魔化す。それに対して八神も特別意識せず笑みで応え、それから握っていた手を離す。

「ほな、私はこれから仕事があるさかい、これで失礼させて貰うな。ヴィータ、クルトのことは任せたで」

「おう、任せろ！」

腕を組んで胸を張るヴィータを見下ろし、八神は笑みを浮かべる。その笑みはクルトには向けたものとは別種の、我が子を見守る母親のそれに似ていた。次いでクルトにも視線を寄越して八神は敬礼し、クルトも答礼して応える。それを見届けてから、八神は「ほなな」と再度別れの言葉を告げ、部屋から出て行った。

「じゃあ、あたしらも行くとするか。お前にはまだまだ教えることが山積みだからな、今から戻って教導の続きだ」

「あ、はい」

未だ右手に残る感触に気を取られていたクルトは、ヴィータの言葉に直ぐには反応出来なかった。訳もなく背徳感を感じ、拳を握り込むことで感触を消し去ることに努め、一足先に扉を潜ろうとしていたヴィータの後を追った。

第二話

新暦７５年４月、この春から稼働するここ機動六課の本部隊舎にて、設立式が行われていた。ガラス張りの天井から射し込む柔らかな春の陽気は、余すことなくロビーに注がれている。前方には部隊長である八神二等陸佐を中心に、各分隊の隊長陣と隊長補佐も並ぶ。それに相対する形で機動六課の構成員が立ち並び、各隊長陣の紹介をした後に控えていた新たな部隊長の言葉を待っている。そんな穏やかでありつつ緊張の糸が一本張った空気の中、部隊長然とした八神が壇上で一歩前へ出る。

「機動六課課長、そしてこの本部隊舎の本部隊長、八神はやてです」

名乗り出た後、周囲から拍手が送られる。八神はそれを冷静に受け入れ、拍手が止むのを待ってから話し始める。

「平和と法の守護者、時空管理局の部隊として事件に立ち向かい、人々を守っていくことが、私たちの使命であり成すべきことです。実績と実力に溢れた指揮官陣、若く可能性に溢れたフォワード陣、それぞれ優れた専門技術の持ち主のメカニックやバックヤードスタッフ。全員が一丸となって、事件に立ち向かっていけると信じています」

そこまで言うと、八神はふっと表情を和らげる。

「まぁ、長い挨拶は嫌われるんで、以上ここまで。機動六課課長及び部隊長、八神はやてでした」

どこか砕けた調子で、八神は最後に右手を挙げて話を締める。そ

して再び拍手が送られ、入れ替わりに彼女の副官である眼鏡を掛けた青年――グリフィス・ロウランが前に出る。

「設立式はこれで終了となります。この後、各員は所定の持ち場に付き、それぞれの作業を開始して下さい。それでは、解散とします」

グリフィスの言葉を契機に、整列していた隊員たちが散り始める。それはクルトも例外ではなかったが、彼は自分の置かれた立場の曖昧さから、明瞭な行動を選択できないでいた。

今のクルトには自分の訓練を優先する案が一つ、もしくは交替部隊の第一分隊員として行動することが一つと、二つの選択肢がある。前者についてはこの部隊に引き抜かれるにあたっての条件の一つであり、それは部隊長の八神からも許可を得ている。後者は一部隊員としての責務であり、自身の勝手で逃れるなどもってのほかだ。どちらにせよ、自分には判断のつけようがない。隊長に直線聞くのが最善だと、クルトはそう思い至った。新しい部隊に配属されたことで緊張し、普段なら悩まないことにまで思慮が及んだのだろう。

善は急げとばかりに、クルトは早速隊長の姿を探す。各員がロビーから散り散りに出て行く中、二人で連れ立って歩いて行くピンク色の長髪が見えた。見間違いようのない目当ての人物の後ろ姿を見つけ、見失わないように急いで駆け寄り声を掛ける。

「シグナム隊長！」

声を掛けられた女性――シグナムは、後頭部で結わえたポニーテールを揺らして振り返る。彼女の切れ長の流し目は僅かに細められ、凛々しい表情には疑念の色が薄く浮かんでいた。

「お前は確か……」
「自分は交替部隊第一分隊員のクルト・ローレル空曹であります」
彼女の表情から自分の名を知らないと判断したクルトは、まず敬礼と共に自己紹介をする。
「あぁ、ヴィータの教え子と言うのはお前か。どうした、早く自分の持ち場に行かなくていいのか？」
「あの、実はそのことで聞きたいことがありまして……。今から俺が行くのって交替部隊の場所でいいんですか？」
「お前……」
シグナムが呆れ顔と共に、何を言っているんだ、と目で訴えてくる。その様子にクルトはうろたえながら、「いや、あの」と言い訳がましく言葉を紡ぐ。
「自分の所属がそこだってのは分かってるんですよ。でも、俺がこの部隊に来るときの条件――っていうか引き抜かれたとき、部隊長に今まで通り教官から教導を受けて良いって言われたんで。今日は初日だし、どうしたらいいのかなと思って……」
「ふむ、そう言うことか……」
シグナムは顎に手を当て逡巡したのも束の間、
「私はお前の教官ではないのでな。あくまで交替部隊の隊長としての意見になるが……。初日の今日は顔合わせの意味もある。なら、そちらに行った方がいいのではないか？」
言われてみれば、とクルトはシグナムの意見に内心で同意する。機動六課における自分の本分が、交替部隊の一員としての職務であ

るのは承知しているはずだった。それでも、心のどこかで訓練を優先させたい自分がいた。わざわざシグナムに尋ねに行ったのも、あわよくばと邪な思惑があったのも事実だった。

そんな浅はかな自分を自覚し、罪悪感を覚えたクルトは、意識して張り上げた声で敬礼を向ける。急な態度の変わり様にシグナムは少しばかり呆気に取られたものの、すぐに気を取り直しフッと小さく笑んでみせる。

「いい返事だ」

大人の雰囲気を持つ彼女の笑みに、クルトは先ほどまで抱いていた罪悪感を忘れ、つい見惚れてしまう。「ところで……」と発するシグナムの一言が耳に入り、クルトはハッとして我に返る。数秒前までの反省が無に帰った気がし、再び募った罪悪感に今度こそ余計な思考を押しやったクルトは、続くシグナムの言葉に集中した。

「クルト、自分の行く場所は分かるな?」
「はい、それは大丈夫です。……あの、お時間取らせてすみませんでした」

背徳感から心苦しい思いを抱いていたクルトは、礼儀や形式とは関係なく謝罪の言葉を口にする。

「その言葉は私より隣の奴に言ってやれ。執務官殿は随分と多忙らしいからな」
「し、シグナム、私は別に……」

からかうようなシグナムの口調に、傍観に徹し蚊帳の外だった女性があたふたと取り繕う言葉を探す。悪戯な笑みを浮かべたシグナ

ムの調子から、その台詞が軽い冗談であることは想像に難くない。だが、彼女の見た目から冗談を言うようには見えず、加えて胸に募った感情とが相まったクルトは、シグナムの言葉を真に受け腰を折って頭を下げた。

「本当にすみませんでした、ハラオウン執務官」

「あ、私なら大丈夫。だから顔を上げて、ね？」

フェイト・テスタロッサ＝ハラオウンに促され、クルトはゆっくりと頭を上げる。視線の先の彼女はどこか困惑気味の苦笑を浮かべていた。

「忙しいっていっても今日は初日だし、顔合わせだけみたいな感じなんだ。少しお話しするくらいなら問題ないから、そんな顔しないで？」

フェイトはそれまでの表情を変え、不純物のない宝石のような赤い瞳を細めて微笑む。安心感すら覚える笑みを見つつ、クルトは気を遣わせたのでは、と申し訳ない気持ちになる。そうは思っても、ここで謝ったら余計に気を遣われると考え、返事の代わりに情けない表情を口を引き締めるようにして誤魔化すことにした。

まだ何か言いたげなフェイトだったが、それ以上は何も言わなかった。次いでシグナムに顔を向け、非難する視線を投げ掛ける。

「もう、シグナム！　冗談もほどほどにして下さい。新人が困るじゃないですか」

「すまない、まさかそこまで深刻に構えられるとは……。私の戯れ言は気にしないでくれ」

フェイトに窘められたシグナムは、素直にクルトへ謝罪する。上官からの言葉に戸惑うものの、幾分か冷静になれていたクルトはそれを面には出さなかった。しかし、ロクな言葉が見つからず、「あ、いえ、そんな……」と取り敢えず言葉を絞り出す。

「……あの、自分はそろそろ……」

続く言葉が見つからず引き際を見誤ったクルトは、彼女らが察してくれることを期待して暗に時間が迫っていることを伝える。我ながら脈絡もないな、とクルトが思う間に、察したらしいシグナムが「ああ……」と納得した声を出す。

「なんだかんだで引き留めてしまったな。この際だ、他に聞きたいことがあれば答えるぞ」

「聞きたいこと……あ、今日ってシグナム隊長は来ないんですか？」

何か一つは聞かなければならないと、どうしてかそう考えたクルトは、言いながら思いついた疑問を尋ねる。

「私か？　私は今から聖王教会の方へ出向かなくてはならないのでな。すぐにとはいかないが、後で一度顔は出すつもりだ」

そんな他愛のない質問にも彼女は真面目に答える。「他にはあるか？」と続けて言うシグナムに、クルトは今度こそ「ありません」とハッキリした口調で答えた。

「そうか。……初日だと言うことで緊張しているだろうが、肩肘を張り過ぎるなよ。行くぞ、テスタロッサ」

「はい。じゃあね、クルト」

桃色と金色の長髪を敬礼で見送った後、上官と対面していた緊張感を溜め息と共に吐き出す。それで心持ち楽になれたクルトは、今後の行動を脳内でシミュレートしてみた。

これから交替部隊の隊員と顔合わせをするにあたり、まず向かうべきは第二休憩室だ。そこはこの建物の二階に設けられているので、一階からは階段を上がればいいだろう。話し込んで少しばかり遅れたが、早足で行けば十分もかからず着く筈だ。

目的地までの道順を流す程度に頭に描いた後、何の気なしにロビーを見渡す。フロア内にはクルトを除き、数組の局員が談笑しているのみだ。一人で突っ立っている自分を客観的に見てしまい、周りから伺う視線を受けていると勘違いしたクルトは、逃げるように早足でその場を後にした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0414y/

魔法少女リリカルなのはStrikerS 変わらないもの

2012年1月6日14時59分発行